

## 〈書評〉

## ガミオ = ボアズ往復書簡を論じるための 問題系とは何か？

——大村香織『革命期メキシコ・文化概念の生成  
——ボアズ・ガミオ往復書簡の研究』——

太田好信

### I はじめに

異文化への関心は、歴史学の始祖としてしばしば語られるヘロドトスの書にも存在してきた。だから、歴史学と文化人類学は共通の想像力をもつという物語も、それなりに説得力がある。近代になり学問領域が少しずつ確立されると、それぞれの研究対象は選別され、方法論はより精緻になる。その結果、両者の差異が目立つようになり、両者の想像力をめぐる類縁関係についての認識は背景へと退いた。それでも、類縁関係は消滅してしまっただけではない。

両者の「哲学」——歴史学では「歴史哲学」、文化人類学では「認識論」（知識の生産に関わる哲学）ということばで言及されることが多いが——を振り返るとき、いまだに類縁関係の痕跡を確認することができる。たとえば、歴史哲学者コリングウッドは、歴史研究において、知る者（knower）と知られること（known）との相互依存性を主張し、相互独立を主張するリアリズム——これが自然科学の認識論だが——を拒絶する。彼は、歴史研究の根底にあるのは、命題論理学ではなく、問答論理学——歴史的真相を「問いと答え」の関係のなかで捉えること——であると主張している。文化人類学者のなかでは珍しく認識論に言及するファビアンも、フィールド調査での知識形成過程について論じるとき、コリングウッドとほぼ同じ語り口を採用している（Collingwood 1978 [1939]:45; Fabian

2007:22)。コリングウッドやファビアンによれば、歴史学的、文化人類学的知識の特性とは、対象を捉えるアプローチがその対象を成立させていること——つまり、「媒介性」——にあるという (Collingwood 1978 [1939]:36-37; Fabian 2007:116-117)。もちろん、歴史学や文化人類学の「哲学」には媒介を否定するリアリズム (それを基盤にした「実証主義」) も存在するが、評者はこのコリングウッドやファビアンと立場を共有している。歴史において、過去を現在に甦らせるためには、媒介性を意識することが不可欠である。

いま述べたように、評者の読解の視座をあらかじめ明確にしておくことは、多様な読書経験が可能であろうテキストを前にして、評者が著者に対して示しうる最低限の礼儀かと思われる。『革命期メキシコ・文化概念の生成』(大村香織著、新評論、2007、以下本書からの引用は頁数のみを記す) は、歴史学と文化人類学——もちろん、それだけには限定されないだろうが——の両方の分野にまたがるテーマが論じられているわけであるから、評者の読解の視座が「ラテンアメリカ (地域) 研究」に位置づけられていないからといって、あながち「的外れ」ではないと考えている。しかも、著者自身が、おもにガミオとボアズの業績を振り返る本書の研究の意義を、はっきりと文化人類学の領域に位置づけていることを確認しておきたい (p.310)。

さて、本書は1909年から25年にかけてフランツ・ボアズ (1858-1942) とマヌエル・ガミオ (1883-1960) との間で交わされた書簡の検証作業をとおして、これまで焦点化されてこなかったいくつかの課題にアプローチしようとする。そのもっとも重要なものは、ボアズが相対主義者、ガミオが統合主義者として対立的に語られてきた傾向とは異なり、両者の交流が生んだ『『文化』の概念が錬磨されるプロセス』を明らかにしようとすることであるという (p. iii)。評者がこの課題を中心に据えて書評を進めようとする理由は、この課題のなかに、芸術と文化との概念的差異、ボアズ = ガミオの交流から明らかになる問題系の特異性、さらには、ガミオ (や

ボアズ)の今日の意義をめぐる争点など、評者が本書に対して抱いたいくつかの疑問が含まれているからだ。

ボアズは、これまで文化人類学の学説史だけではなく、(先住民研究や「黒人研究」を含む広い意味での)アメリカ研究における重要な人物——結果的には、それらの研究成果から彼の功罪が明らかにされてきた——として取り上げられ、多くの研究の蓄積がある一方で、ガミオは、著者がメキシコにおけるガミオに対する評価が時代ごとに大きく異なることを示しているように、いわばメキシコ史の領域において限定的に論じられてきた人物だった。著者は、ガミオの思想——そのなかで中心となるのは、革命後国家(nation)とそれを担う国民の形成というプロジェクト——を、彼とボアズとの交流関係に着目することによって、これまで彼の仕事が論じられてきたのとは異なった問題系へ——それが、ガミオの今日的意義を示すことになろうが——と導きだそうとする。(だが、メキシコにおける近年のガミオ評価と、著者の関心はどう関連しているのだろうか。)ガミオの関心からすれば、ボアズが主張する人種と文化との区別を、当時メキシコが直面していた国内の状況——異なった「人種」や「民族」を包含する国民の創出——と対外関係の状況——欧州文化とは異なった独自の文化を保持した国家アイデンティティの形成——のなかで、再解釈する必要があったという(p.192)。

## II ボアズとガミオの今日的意義

本書を読むまで、評者にとってガミオは、歴史家G・ストックキングが「南方戦略」という名で呼んでいた、ボアズの提示した新世界における人類学的研究の拡張計画のなかに登場する人物の一人にすぎなかった(Stocking 1974: 285)。ボアズは(1911年にメキシコ市に開校された)アメリカ考古・民族学国際学院(EIAEA)を基盤にして、研究調査地の拡大を考えていた。学院の開設を推進したボアズの活動、そして革命勃発後1年も経過していない激変するメキシコ社会の様相、さらにはガミオがその

学長に就任し、革命が一段落した1917年には農業・勸業省内に考古・民族学局——後に、人類学局に改称——をつくり、メキシコ国内における人類学の制度化に成功するさまについて、著者はアーカイヴの書簡を参照しながら、詳細に歴史を追っている（第3章）。さらに、著者は、メキシコ国内外におけるガミオの仕事をめぐる評価の変貌を、グローバルな社会変動を背景として描き出している（第2章）。評者は、この一連の歴史的過程に関する描写、ならびにメキシコの政治的背景も含めて、ガミオが国民文化（芸術）を創造しようと努力する状況をめぐる章（第5章）の記述的部分から、多くの事実を学んだ。とくに、人類学ではこれまでボアズの「南方戦略」を支援した側にある人物について十分に明らかにされてこなかったため、それを解明した本書の意義は大きいのではなからうか。

著者によれば、ボアズとガミオには、人類学の社会における役割をめぐる理解の相違が存在したものの、この学問の制度的基盤を確保したいというお互いの欲望は共通していたため、両者は「相互に補完的關係」にあったという（p.141, 296-297）。いま述べた理解の相違とは、次のような差異に起因する。一方において、ボアズは「国家の枠組みを超えて研究成果を共有すべき」（p.129）と確信していただけではなく、科学としての人類学は人間を伝統や因習から解放する啓蒙的力の源泉を提供すると考えていた（たとえば、Boas 1889, 1904）。いわば啓蒙としての人類学という発想は、多くのボアズの弟子たちにも共有されている。他方において、ガミオは、同一の人種、共通の言語、共通の文化、さらに共通の過去の記憶を持ち合わせた国家がいまだに誕生していないメキシコの現状に直面し、まず家族的関係を想起させる「patria」という概念で、その難産に対処しようとする。そのとき、援用するのが人類学であった。ガミオには人類学は「国家統治の学」（p.119）——「国学」（p.23）——となる。1916年オブレゴン大統領がガミオの主著『Patriaをつくる（Forjando Patria）』を高く評価した理由も、そこにある。

ボアズは国家の枠を超える科学としての人類学を構想していた。その構

想の根底にあるのは、啓蒙としての科学と「コスモポリタニズム」——著者は、このことばを使わないが (p.219) ——とでも呼べる発想である。ちなみに、近代国家の形成が前提になっている「ナショナリズム」——とくに、国家の理想を体現するものとしてではなく、帝国主義的拡張を隠蔽する「攻撃的ナショナリズム」——は、人間のもつ非合理性の表現にすぎなかった (Boas 1960 [1928]: 94, 104-105)。ガミオは国家とそれを支える国民文化の創成が目標であり、彼にとってメキシコ国家形成と同国が国際舞台で認知を得ることが最大の課題であった。その意味では、著者がいうように、ガミオの仕事を語る時、「nation」と「internationalism」が適切な用語であろう。だが、著者は、第4章において、ボアズとガミオの nation という概念を比較するとき、そのような比較が、両者の論文や著作に現れた語彙の文脈が十分に精査されないままアクロバティックになされているため、評者にはその比較が十分に成功しているとは思えなかった。

ボアズにとり、「人種」——骨相的、あるいは形質的特性などによる分類だけではなく、その分類と道德、知能、行動のパターン、心性などに結びつける説明概念——は、科学的に誤った概念であった。したがって、啓蒙として構想されたボアズの人種学的仕事の目標は、科学的手法によりその誤りを指摘し、正しい知識を示すことにある。著者は、このボアズの指摘を人種に対する対立概念として文化概念が生成されるという問題意識ではなく、現在議論されている「nationality」や「nation」形成の問題系——著者によれば、この問題系は「文化人類学における重要なテーマ」 (p.4) であるという——へとスライドさせている。そうすることにより、著者はあたかもガミオが関心を抱いていたメキシコ国民文化を語りだそうとする努力とボアズの人種批判とを、ナショナリズムをめぐる問題系において論じることが可能であるかのような思い込みの上に議論を進めている。

だが、ボアズのナショナリズム、ならびに上述の「nationality」や「nation」などの概念への言及は、一般読者を対象とした啓蒙書の限られた章でしかおこなわれていないし、それらが現在政治学のナショナリズム研究

の問題系で議論されているテーマ——著者は、第1章において、この問題系を示している——に無媒介的に、概念の再解釈なしに、直結しないだろう。結論からいえば、評者にはこの問題系へのスライドは、困難をきわめているとしかいいようがない。

評者は、ボアズの思想には現在でも救済されるべき要素と、それに値しない要素があると考えている。後から来て、相続する者たちの宿命であるが、何を相続するべきか、という問いと相続する行為は不可分なのである（デリダ 2007:60）。たとえば、ボアズの知的遺産に関する救済方法のひとつを示したのはストックキングだった。彼は、ボアズを弁護する人たちの間でも、ボアズの（制度上ではない）知的貢献とは何かを示すことが困難だった時代に、ボアズの貢献とは何かを示さなければならなかった。それは、「ボアズを忘れよう」と主張していたL・ホワイトのような人物が影響力をもっていた時代である。

そんな時代に、ストックキングは、アメリカ人類学はいまだにボアズの「知的影響」下にあり、20世紀のアメリカ人類学の発展史は、ボアズの提示したさまざまな含意を変奏しているにすぎない、という（当時としては）驚くべき解釈を提示したのである（Stocking 1974:1, 17）。したがって、「知的影響」とは、ボアズの弟子たちがアメリカ人類学の制度を掌握し、学問を再生産してきたということだけではなく、ボアズの思想的影響力のことを指して述べたことばであった。著者は、ガミオの仕事のどのような部分に、人類学に対する今日的意義を見出しているのだろうか。

ストックキングは、ボアズの仕事——とくに、1883年から1911年までの仕事に限定しているが——に、ふたつの今日的意義を見出す。第一には、19世紀の進化論から離脱し、文化と人種とのリンクを断つと同時に、それらを階層化する発想を退けること。第二には、歴史内存在として人間の行為を決定付ける枠組みとして文化を捉えることである（Stocking 1974:19）。

まず、第二の意義は、70年代のギアツやシュナイダーが「ボアズ派」を自認していること、サーリンズですら（その成果は賛否両論あるが）ボア

ズの文化理論を構造主義に節合しよとしていたことから、文化人類学の現状を理解するためには、重要な指摘に違いない (Schneider 1995: 203; Sahlins 1976)。もちろん、文化相対主義として語り継がれてきたスローガンの萌芽が、ここにはある。

だが、第一の意義については、そう簡単に判断は下せない。なぜなら、一方では、アメリカ合衆国の黒人文芸活動家たちは、ボアズの仕事から文化への貢献が人種により規定されないことを学んでいるし、また G・フレイレも同様のレッスンを学んだという (フレイレ 2005: 6)。他方では、ボアズが人種の科学的根拠を批判してから 1 世紀、その代替概念として「エスニシティ」(p.22) が提案されてから半世紀が過ぎているが、人種による差別構造が消滅したわけではないからである。1 世紀におよぶ啓蒙が効果をもたらさなかったのは、どうしてだろうか。そもそも、ボアズの人種概念批判が間違った方向に向けられていた可能性が浮上する。

たとえば、政治学者 A・マークスは、1903年 W・E・B・デュボイスが『黒人のたましい』の「序想」に残した「20世紀の問題とは、カラー・ラインの問題だ」ということばを、次のように解釈していることは示唆的だ (Marx 1998: 1)。近代の特徴である国民国家形成の諸過程——工業化の展開、階級闘争の拡大、ナショナリズムの隆盛など——は人種というカテゴリーを消去するどころか、それを一層強化する方向へと動いた。換言すれば、人種は国民国家形成の過程の構成要素になっているのだ。もし、デュボイスが正しいのなら、そして歴史はデュボイスの正しさを証明しているが、啓蒙では人種による差別は消去されないのは当然である。差別の構造は偏見に訴えても、偏見から導き出されるものではないのだから。したがって、評者は、ボアズの人種概念批判は、どこにも行き着かないどころか、リベラリズムの理念——とくに、人種などの「原初的アイデンティティ」を公共圏から排除する立場——と同調し、人種とそれに基づいた差別構造の両方の存在を否認し、差別構造への抵抗や批判の根拠を奪う結果すら生みかねないと考えている。

ふたたび本書に戻れば、著者はボアズとガミオとの書簡の検証をとおし、て明らかになるのは、両者の「相互補完関係」(p.297)であるという。この「相互補完関係」は、米墨両国における人類学の制度化に関する歴史に現れているだけではなく、文化や人種概念の「精製」(p.297)、さらには文化相対主義の「洗練」(p.297)という、いまだに精緻化の過程にあった諸概念の柔軟な解釈にも見て取れるという。前者は制度化の歴史、後者は思想史的領域に帰属するテーマである。

評者の疑問は、以上に要約した歴史を明らかにすることにより、今日でも論争の対象となり続けている文化概念——とくに、人文系の学問におけるこの概念の意味ではなく、文化人類学における意味——の、どのような側面に新たに光が当てられ、どのような新しい解釈が提示されるのだろうか、ということである。上述したように、著者が明らかにしようとしているガミオの仕事とメキシコの社会状況とを跡付ける作業は、詳細であり、高い評価に値すると判断する。だが、ボアズとガミオの交流がもつ相互補完性という主題のうち、とくに思想史の領域に帰属するテーマ——これが、文化概念の再定義に関わる部分だが——としては、著者の議論が充分な説得力をもっているとはいいがたい。

### Ⅲ 文化と芸術の概念的差異

ガミオはメキシコの芸術奨励運動で著名な人物である。ガミオが示した関心は、メキシコだけではなく、他の新世界の独立国家でも共有されていた。たとえば、本書が扱う時代と同じ時期であるが、ヴァン・ヴィック・ブルックスは、アメリカ合衆国でも、国内の芸術活動は独自の創造性を発揮しておらず、いわば欧州文化の影に存在しているが、その理由はまさにアメリカ国家という概念が統合を欠いているからだと主張している(Brooks 1918)。そこで求められていたのは、欧州文化の不完全な模倣ではない、アメリカ合衆国に相応な独自の国民文化の形成であった。知識人たちが格闘したテーマは、どのような過去を再解釈することによって、独



自の文化を導きだすことができるのか、いわば（ブルックスのことは借りれば）「利用可能な過去」の「創造」であった。また、時代は多少ずれるが、ボアズと関連するもうひとりの人物 G・フレイレも、対外的には（アフロ＝ブラジリアンたち下層階級の）サンバをブラジルの国民文化として位置づけたように、国民文化の形成に多大な貢献をし、奴隷解放後の共和国の統合を補強するイデオロギーとしては「人種民主主義」を提案していた人物である（Viana 1999; Marx 1998）。

ガミオの仕事に戻れば、本書が取り上げる時期には、先スペイン期の芸術に関するものが多数存在しているという（p.229）。その内実を検証すると、学院の発掘調査の資料などから「メキシコ文化の母体」を探求していた。彼がそこで直面していた矛盾は、発掘された遺物に人びとは「情緒的つながりを感じえるか否か」（p.237）ということであった。その矛盾を意識することから、（1921年に実現することになる）「芸術局」の創設が提案されている（p.238）。求められる芸術とは、「外国からの直輸入でなく、メキシコ『固有』」の、しかも「国民の生活を…反映した」、「メキシコ的美的情念を喚起しうる」ものでなければならなかった（p.239）。

このように、ガミオは過去の再解釈をとおして、メキシコ的芸術の創造を構想していた。その創造の主体となるのは、メキシコ人芸術家であり、創造の源泉のひとつは「インディオ」の遺産にある。そのため、ガミオは現在の「インディオ」は先スペイン期のインディオとは、断絶されていないと考えていた（p.280）。他のラテンアメリカ諸国——たとえば、グアテマラ——では、まさに両者を断絶することにより、先スペイン期の文化を国家遺産として位置づけ、政治的周縁化と文化的回収を達成したことを想起すれば、当時のガミオの見解は、特異なものであろう。同時に、彼は人類学局の活動をとおして、テオティワカンの「インディオ」たちに対して「美的プロパガンダ」もおこなっている。その内容をみれば、正しい「インディオ」の美とでもいえるものを広めていたことがわかる（p.274）。一見矛盾するかにみえるこのプロパガンダの背景には、「イン

ディオ」たちの経済的基盤を確保すると同時に、「劣等意識の解消」(p. 281)を目指そうというガミオの思いがあった。

ガミオの芸術奨励運動を描き出す第5章は、興味深い資料を含んでいる。繰り返すが、評者はそこから多くを学んだ。しかし、著者が「ガミオの思想活動の文化人類学的意義」に言及するとき、評者は次のような文章に直面し、驚きを禁じ得なかった。「ガミオにおける『芸術』とは、現在文化人類学で用いるところの『文化』の概念に極めて近い」と (p.311)。

それでは、現在文化人類学で用いられている「文化」の概念とは何だろうか。(文化人類学と隣接する他の)人文学——文学研究、歴史学、社会学、哲学など——ではいうに及ばず、文化人類学だけに限定してみても、文化概念についてはさまざまな反省や批判があり、少しでもこの学問内で仕事をしてきた者にとっては、すでに自明性——すなわち、「現在文化人類学で用いるところの」という表現を許さないという意味——を失っている。著者が、ガミオのいう「芸術」は「現在文化人類学で用いるところの」文化と「重なる」——きわめて、曖昧な表現としかいようがないが——と考える理由は、「nation内の全ての成員が共有すべき集合的アイデンティティに関わるものであり、またnationの内と外とを区別するための指標」であるからだ (p.310)。文化は、「集合的アイデンティティに関わるもの」——この表現もまた曖昧であるが——であり、ある種の「指標」にすぎないのか。

それでは、第Ⅱ節で述べたように、ストッキングがボアズを救済するとき主張した文化の捉え方との異同は、どう説明されるのだろうか。その捉え方のなかには、いま人類学者たちが反省の対象としている、全体性、統合性、ならびに、社会集団間の差異を説明する「文化」だけではなく、媒介性というボアズから彼の「弟子たち」——ベネディクトやミードに限定されず、ギアツやシュナイダーも含むが——へと継承された文化概念の核となる発想も存在するはずだ (Stocking 1968 : 159)。

#### IV おわりに

本書を前にして評者が戸惑う理由は、ふたつある。第一の理由は、メキシコ史のなかでのガミオの諸活動の位置づけ、さらにはその学問的評価の変化などが詳細になされている一方で、ボアズとの接点をとおした議論のうち、両者の制度上の目論見が合致したことは跡付けられているが、思想上の関係が明確ではないためである。第二の理由は、副題に反して、ボアズとの書簡から明らかになる部分よりも、ガミオ自身のテキストの読解やボアズの仕事の読解——著者の読解はこれまでの学問的蓄積がいまだに未消化なため、評者は残念ながら違和を覚えた——をとおした分析が主流を占めていた読後感をもったからである。

その結果、ひとつの疑問に到達した。それについて、評者は答える立場にはないが、疑問だけは提示しておきたい。その疑問とは、20世紀初頭のガミオの仕事（とならんでボアズの仕事）を位置づけるために適切な文化人類学の問題系は何かということである。（もちろん、文化人類学ではない領域の問題系を選択することも可能であろう。だが、著者は本書を文化人類学の問題系に位置づけている。）問題系にそって思考するとは、資料を「透明な」情報として読むのではなく、二次テキスト群を含め、それらの読解の枠組みをも意識化する必要があるということの意味する。研究者が歴史資料と向き合う作業に内包される時間が、媒介を要求し歴史資料の意味をふたたび開いてゆくのである（Said 2004: 25）。謝辞に指導教官のことばとして記されている「ガミオの心情を彼の身になって」（p. viii）考えることは重要である。と同時に、ガミオの心情は著者の視点を媒介せずには獲得できないわけであり、その視点を意識することも、同時に忘れてはならないだろう。解釈の枠組みについて意識的になることとは、コリングウッドの歴史哲学においては、問いの部分にあたり、その問いへの答えとして歴史が存在する。そして、このような発想は、ストックキングがいうように、本書の重要な登場人物のひとりボアズ自身も、萌芽的なかたちであったにせよ、共有していたのである。いま述べたことは、別に特異な内

容ではなく、ある時代まで文化人類学では共有されていた気がする。

(大村香苗『革命期メキシコ・文化概念の生成——ボアズ・ガミオ往復書簡の研究』新評論、2007年2月刊、A5版、x+401ページ、6000円+税)

## 引用文献

- Boas, Franz. 1889 "On Alternate Sounds," in G. Stocking (ed.), *A Franz Boas Reader* (Chicago : The University of Chicago Press), pp. 72-77.
- . 1904 "The History of Anthropology," in G. Stocking (ed.), *A Franz Boas Reader* (Chicago : The University of Chicago Press), pp. 23-36.
- . 1960 [1928]. *Anthropology and Modern Life* (New York : Dover).
- Brooks, Van Wyck. 1918. "On Creating a Usable Past." *The Dial*, LXIV (April 11), pp. 337-341.
- Collignwood, R. G. 1978 [1939]. *An Autobiography* (Oxford : Oxford University Press).
- デリダ、ジャック. 2007. 『マルクスの亡霊たち』増田一夫訳. 藤原書店。
- Fabian, Johannes. 2007. *Memory against Culture* (Durham : Duke University Press).
- フレイレ、ジルベルト. 2005. 『大邸宅と奴隷小屋 (上)』鈴木茂訳. 日本経済評論社。
- Marx, Anthony. 1998. *Making Race and Nation* (Cambridge : Cambridge University Press).
- Sahlins, Marshall. 1976. *Culture and Practical Reason* (Chicago : The University of Chicago Press).
- Said, Edward. 2004. *Humanism and Democratic Criticism* (New York : Columbia University Press).
- Schneider, David. 1995. *Schneider on Schneider* (Durham : Duke University Press).
- Stocking, George. 1968. *Race, Culture, and Evolution* (Boston : Free Press).
- . 1974 "The Basic Assumptions of Boasian Anthropology," in G. Stocking (ed.), *A Franz Boas Reader* (Chicago : The University of Chicago Press), pp. 1-20.
- Viana, Hermano. 1999. *The Mystery of Samba*. John Chasteen, trans. (Chapel Hill : University of North Carolina).